

さよならのない別れ

加藤 良一

令和4年（2022）1月28日

『Living Will』No.184（2022年1月号）に掲載された、『「さよならのない別れ」をどう生き直すのか』は、とても印象深いものだった。ノンフィクション作家柳田邦男さんのインタビュー記事である。『Living Will』は日本尊厳死協会の会報で、年4回発行されている。

『さよならのない別れ』とは、柳田さんが出版する本のタイトルでもある。文字どおり、コロナ禍のなか、ある日突然訪れる不条理な死に際のことである。

志村けんさんの死に衝撃を受ける

柳田さんが、さよならの言えない「特異な別れ」を直接的に感じたのは、コメディアン志村けんさんのコロナ感染死だった。

けんさんのお兄さまは、弟にまったく会うことができないまま、遺骨を抱いて帰宅した。玄関先でマスコミに囲まれてインタビューを受けた。言葉少なに「コロナで急入院し、最期の別れもできなかった」、「棺に納める時も立ち会えなかった」、「火葬場でも立ち会えなかった」と悲痛な思いを漏らした。それを聞いた柳田さんは、人生の最期に大事な家族や愛する人たちと別れの言葉すら交わすことができない、「さようならと言えない別れ」が突然やってくる、これは大変な問題だと思ったという。

けんさんは、新型コロナウイルスによる肺炎で、令和2年3月70歳で亡くなられた。その後、出身地の東京都東村山市に銅像が飾られた。銅像のポーズは、けんさん定番のギャグ「アイーン」がモチーフとなっている。



柳田さんは長年、死の問題について考察してきたが、たとえば、がんなどの死はあるていどじわじわやってくるから、本人も家族もあらかじめ考えながら「その時」を迎えられるが、しかし、コロナの死はそれとはまったく異なる。予想もしないうちに隔離病棟に入れられ、面会も許されず拳句には看取りもできない。家族や愛する人と会う時にはすでに灰になっている。なんという不条理であろうか。

人は物語を生きている

柳田さんは、「人は物語を生きている」、そして「その物語の**最終章は自分で書く**」ことを強く勧めている。つまり最期は意志的に生き抜くことの重要性を唱えている。この点は日本尊厳死協会の根本理念と完全に一致している。その大切な「最終章を自分で書けない」ということは人間の尊厳にも関わる大問題なのである。

「物語」を理不尽に断ち切る最悪なものは戦争であり、さらに災害、不慮の事故などがあるが、それとまったく同じことが新型コロナウイルス感染症で起きてしまった。現在は新たに変異したオミクロン株が猛威を振るっている。ただし、志村けんさんのような悲惨なケースはほとんど聞かない。この変異株の正体はいまだ解明されておらず、今後の疫学調査に待たねばならない。

「さよならのない別れ」は、あらかじめ個人の意志で自らの最期を決める尊厳死とはまたちがった大問題であり、大変ショッキングなことであるが、新型コロナウイルス感染症の全貌が明らかになり、予防法や治療法がそれなりに確立すれば光が見えてくるはずである。

[Back](#)[「人の尊厳とは」Topへ](#)[Home](#)[「Home Page」へ](#)